# upa-√ās に祈りの概念を読みとれるか

前 谷 彰 (恵紹)

## § 0 祈りの意味概念

『広辞苑』では、「祈る」ということばの意味が次のように挙げられて いる。

(1)「神や仏の名を呼び、幸いを請い願う」「祈願する」、(2)「心から望む」「希望する」「念ずる」、(3)「(相手や事物に) わざわいが起こるように祈願する」「のろう」

ちなみに、『大漢和辞典』は「祈」という漢字の意味として、「神にねがって福を求める」を第一義に、「もとめる」「つげる」等の意味をあげている。また、『字通』『字統』では「祈」という文字について、「福を求める祭」と「悪を除く祭」の二義の説明がなされている。

「祈り」に相当する英語の"pray"やフランス語の"prier"はラテン語の"precārī"に由来し、「懇願・希求する」が原義である。サンスクリット語の用例によってみると、「祈り」に相当する語として、 $\operatorname{pra-}\sqrt{\operatorname{arth}}$ や $\operatorname{\bar{a}-}\sqrt{\operatorname{yac}}$ 等を上げることができるが、いずれも「懇願・希求する」が原義である。

そうすると、「祈り」というのは基本的に、「何かを懇願・希求する精神活動及びその行為」を意味することばと簡言できるであろう。しかし、こ  $upa-\sqrt{a}s$ に祈りの概念を読みとれるか(前谷 彰(恵紹)) -19

の場合、いったい何を懇願・希求するのかが問われることになるが、漢語の「祈」ではそれが「福」であった。「福」とは、健康や長寿や富や名声を指示する、ある意味での幸福感(心的充足感)に関わる事柄であるが、「祈り」という行為はこの事柄が成就し、その結果として幸福感(心的充足感)が約束されるであろうことへの〈期待〉が前提されていると考えるべきであろう。但し、「祈り」に個人の幸福感(心的充足感)の達成が前提されている限り、「祈り」は『広辞苑』の(3)のような他者の不幸を願う呪いのような精神活動やその行為を指示する意味概念を離れることがないことに留意しておく必要がある。

すると、「祈り」はいったい何を媒体として行われるかについて、考えなければならない。一般的に「祈り」の媒体は、特定の神や仏と考える傾向にあるが、決してそうではない。その媒体は特定された事物である場合もあれば、特定されない何ものかである場合もある。このことは、『広辞苑』の(2)のような、「心から望む」「希望する」「念ずる」という場合の「祈り」の実際相を想定するとよく分かる。

例えば今,ある男が重病に冒された友人の病気平癒を祈るとしよう。 その男の、友人の病気平癒を「心から望み」「希望し」「念ずる」という 「祈り」には、必ずしも特定の神や仏という媒体は必要とされない。この 場合の「祈り」は、その男の内部(内心)だけで行われる精神活動に限定 されていてもいい。つまり、彼の内心から発動する「思い」の力が、友人 の病気を平癒させることも十分予想されるのである。そうして、友人の病 気平癒を懇願・希求することによって、その事柄が成就された時には、友 人のみならず祈ったその男の両者に、幸福感(心的充足感)が約束される ことになるだろう。

但しこの場では、その「思い」が具体的に何であるのかとか、慈悲なの - 20 - upa-√as に祈りの概念を読みとれるか(前谷 彰(恵紹)) か愛なのかというような議論をするつもりは毛頭ない。しかし、祈る側の「思い」が期待した事柄を成就せしめる力を持っているとすれば、その「思い(の力)」にはことばでは表現し難い、ある種の〈呪術性〉を認めざるを得ないであろう。そこで、ここで言う〈呪術性〉とは次のような意味合いで用いることを、少し説明しておかなければならない。

「祈り」の実際相は、『広辞苑』に示されたような三つの類型のうち、 ①には「神や仏の名を呼ばずとも、神仏やある事物を媒体として、幸いを 請い願う」という意味概念を補足しておく必要があろう。しかし、神仏の 媒体の有無に関らず、「祈り」の実際相には次のような二つのパターンが あることを想定しておかなければならない。

つまり、祈る側の「思い」は、声(音)として発せられる場合もあれば、声(音)をともなわない内心のことばとして発動する場合もあるということである。神仏やある事物の媒体の有無に関係なく、懇願・希求した事柄が成就するということは、祈る側の「思い」が音声の有無を離れた〈ことば〉もしくはそれ以外の〈何か〉として発動し、それが何らかの効力をもって働いたとも考えてよい。しかし、その何らかの効力は不可視であり、表現し難いもの、それを、本来ならば adhisthāna(加持力)ということばを用いたいところだが、ここでは敢えて〈呪術性〉ということばで表現しておくことにする。

以上の作業を通して、「祈り」とは、「幸福感(心的充足感)を約束する ある事柄が(呪術性を介して)成就することを期待して懇願・希求する精 神活動及びその行為」と概念規定して差し支えないであろう。

当論攷の主眼とするところは、初期仏教典籍に見出される upa-√ās (以下 upaas と記す)という動詞が、今ここで概念規定を行った「祈り」の意味概念を読みとれるどうかを考察することである。しかし、その前段階的

操作として、ウパニシャッド文献に見出される upaas に「祈り」の概念 を読みとれるかどうかについて、若干の考察を行っておくことにしたい。

# §1 ウパニシャッド文献における upa-√ās の意味概念

upaas という動詞は、 $\sqrt{a}$ s(坐る、住する、止まる等)に前接辞である upa(上に、近くに、そばに等)が附されたもので、基本的には「近く(そ ばに)に坐る(住する)」行為を示し、仏教の場合、漢訳用例から「親近す る」等の訳語を与えるのが一般的である。

そこで、当セクションでは、ウパニシャッド文献に見出される upaas に「祈り」の概念を読みとれるかどうかを検証して行くことにするが、限られた紙数のため、以下には『ブリハッド・アーランニャカ・ウパニシャッド』の二例を上げるにとどめる。

## ① $B\bar{A}U$ . II. 1. 2

かのガールギャは語った。「太陽の中におわすプルシャ,わたくしはこれこそがブラフマンであると<u>念じます</u>」と。アジャータシャトウルは語った。「そのことはお話下さらなくても結構です。私はそれをあらゆるものの中の超越者であり,頂きであり,王でもあると<u>念じております</u>」と。このように<u>念じる</u>者は,あらゆるものの中の超越者となり,頂きとなり,王となる。

sa hovāca gārgyaḥ, ya evāsāv āditye puruṣaḥ, etam evāhaṃ brahm**opāsa** iti, sa hovāca ajātaśatruḥ; mā maitasmin saṃvadiṣṭhāḥ. atiṣṭhāḥ sarveṣāṃ bhūtānāṃ mūrdhā rājeti vā aham etam **upāsa** iti, sa ya etam **upāste**, atiṣṭhāḥ sarveṣām bhūtānāṃ mūrdhā rājā bhavati.

#### -22 - upa- $\sqrt{a}$ s に祈りの概念を読みとれるか (前谷 彰(恵紹))

ここでの upaas は、「念じる」というような訳語が妥当と思われるが、 次の箇所はどうだろうか。

## ② $B\bar{A}U$ . IV. 4. 10

無知を<u>信奉する</u>者は、漆黒の闇に陥る。 されど〔謬れる〕学識に満足するする者は、 さらに甚だしき闇に陥るに似たり。

andham tamah pravišanti ye avidyām **upāsate** tato bhūya iva te tamah ya u vidyāyām ratāh.

この箇所は辻直四郎の和訳を用いたが、コンテクストからすれば、upaas の目的語が avidyā であることから、ここでの upaas を①同様に「念ずる」と訳すには無理があるので、「信奉する」という訳語が妥当ということになる。

ちなみに、upaniṣadという語は、√sad(坐る、取り囲む、沈む、疲れる等)に前接辞のupaとni(下に、中に、後方に、近くに等)が附されたもので、upaasと同じ「近くに坐る」という意味以外に、「そばで取り囲む」や「下に坐る」等の意味にも取れる。当論及ではupaniṣadの語義をめぐる問題には深く立ち入ることはしないが、この語とupaasが同義語であるという見解をはじめて打ち出したのがオルデンベルクである。

彼は upaniṣad も upaas もともに「ある人間や事物に対して恭しく坐る」行為と解釈することによって,upaas に「崇拝」(die Verehrung)の観念を読みとった。これに対し,スナールはウバニシャッド文献における定型表現「これを知る者はかく念想する」(ya evaṃ vidvān etad upāste)によって,upaas と $\sqrt{\text{vid}}$  は同義語であるという見解を導き出し,その「知る」という行為の根底にはある意味での呪術的精神が作用していると考えたが,upaas に「崇拝」の観念を読みとることはなかった。

ところが、その後オルデンベルクはドイッセンの「upaas は崇拝という観念とは全く無縁のことばである」という主張によって、痛烈な批判を受けることになるのである。

しかし、upaniṣad 及び upaas という行為に何らかの呪術的な意味合いが含まれていることに着目したシャイエルよって、これらの語に「熱望する、求愛する」(umwerben)という訳語が与えられた。つまり、彼によれば、upaas の原義は「~の近く(そば)に坐る」であるが、具体的には「何かあるものを(呪術的な手段によって)獲得しようと努力する」心理的作用を指示するというのである。

ファルクはシャイエルのこの見解に同意しつつ、upaas は瞑想というよりはむしろ心理的な行為の一種であると同時に生産的な認識を意味すると考えた。そうしてさらに、upaas の行為に upaas する主体とその対象との同一化、およびその事物が持つ特性の獲得」という概念を読みとろうとしたのである。

これらの見解の妥当性云々に関わる問題は別として、以上の操作から、 ウパニシャッド文献における upaas という語は、細かい訳語上の問題は 残るとしても、「念ずる」(①の用例)と「信奉する」(②の用例)の二義を 有すると結論しても差し支えないだろう。但し、①に「念ずる」という訳 語を与えることがゆるされるならば、これは「祈り」の実際相を広義に解 釈し得る好都合な表現と言える。しかし、この「念ずる」という精神活動 及びその行為に、前セクションで概念規定を行った「祈り」の意味概念を 読みとれるかどうかが、最も重要な問題となるのである。

ちなみに、①では後続のII. 1. 3から upaas による様々な功徳が説かれるが、その幾つかを列記すると、次のようになる。

(1) ソーマ・ラージャ (Soma-rāja) を upaas することによって、ソー
 24 — upa-√ās に祈りの概念を読みとれるか (前谷 彰(恵紹))

マを日々欠かすことなく搾り出すことができ、その食物は尽きることがない。

- (2) プルシャを upaas することによって、自分も子孫も威光ある者 (tejasvin) となる。
- (3) プルシャを upaas することによって、子孫や家畜に恵まれ、子孫 がこの世から滅びることがない。尾子世から主だったの得る場合、既 述のシャ

三例を上げるだけで十分と思われるが、これらはすべてプルシャを upaas する「念ずる」ことによって、子孫繁栄や長生や富等の、いわゆる 現世での幸福を獲得することができるという内容を示すものである。

そうすると、ここでプルシャを upaas する「念ずる」という精神活動 及びその行為の根底には、前セクションで概念規定を行った「祈り」と全 く同じ心理的作用を見てとれるであろう。この意味において、"umwerben"「熱望する、求愛する」という訳語の妥当性は別として、upaas に 「何かあるものを(呪術的な手段によって)獲得しようと努力する」心理 的作用を読みとったシャイエルの見解は、十分支持されるべきである。

さらに、シャイエルの見解に賛同しつつ、upaas に心理的な行為の一種を読みとり、それが生産的な認識を意味することを主張したファルクの見解も看過することはできない。

以上のことから、ウパニシャッド文献における upaas は、そのコンテクストによって、「念ずる」と「信奉する」の二つの訳語が与えられるが、前者の場合には、「祈り」という意味概念を読みとることは十分可能であると、結論することができるのである。

# § 2 初期仏教典籍における upa-√ās の意味概念

当セクションでは、初期仏教典籍に見出されるupaasに「祈り」の意味概念を読みとれるかどうかの作業を行うが、限られた紙面故、用例は最小限度にどどめ置くことにした。そこでまずは、その用例を以下に列記してみることにしよう。但し、各用例の最後には参考のために、※を附して『南伝大蔵経』におけるupaasの訳語を記しておくことにした。

① Dīgha-Nikāya, vol. II, p. 273

また私はあなた方に<u>親近しつつ</u>, 聖者たちの妙説を聞いて, インドラの息子となり, 大威神力にして大輝ある三十三天に生まれま した。

Aham pi tumhe ca **upāsamānā** sutvāna ariyāna subhāsitāni Sakkassa putto 'mhi mahânubhāvo mahājutiko Tidivûpapanno.

- ※『南伝大蔵経』第七巻,p. 311(阿部文雄 訳=「仕えまつりて」)
- ② Dīgha-Nikāya, vol. II, p. 287

私は、沙門たちのところで離れて居られるそのお方が、 正覚者だと思いながら、彼ら(のところ)に親近するために行く。

Y'assu maññāmi samaņe pavivitta-vihārino;

Sambuddho iti maññāno gacchāmi te  $\mathbf{up\bar{a}situm}$ .

- ※『南伝大蔵経』第七巻, p.331 (阿部文雄 訳=「近づき (行けり)」
- ③ Thera-Gāthā, G. 179 Kaṇhadinna 長老

親近し, 常に諸々の教えを聞く善人は,

聞きつつまっすぐに甘露の流れ(涅槃)に達した。

Upâsita sappurisâ, sutâ dhammâ abhinhaso;

sutvâna pațipajjissam anjasam amatogadham.

— 26 — upa-√ās に祈りの概念を読みとれるか(前谷 彰(恵紹))

※『南伝大蔵経』第二十五巻, p.153(増永霊鳳 訳=「事へ」)

④ Thera-Gāthā, G. 1027 Ānanda 長老

多聞(の人)に<u>親近しなさい</u>。そして、聞いたことを失わないように。 それは梵行の根本である。そうすれば、法を持する者となるであろう。 bahussuttaṃ **upâseyya** sutañ ca na vinâsaye;

tam mûlam brahmacariyassa; tasmâ dhammadharo siyâ.

(5) Jātaka, vol. V, p. 346 Cullahamsajātaka

ハンサの王はそのような罠に近寄って、捕らえられてしまった。

放たれてそばに坐った〔ハンサの王は〕、この私に語った。

Tādisam pāsam āsajja hamsarājā abajjhatha,

tam abaddho **upāsīno** mamâyam ajjhabhāsatha:

初期仏教典籍において、上例以外にも十数箇所 upaas の用例を見出すことができる。しかし、どれをとっても上例同様に、upaas は基本的に「親近する」「そばに坐る」「近侍する」以外の特別な意味合いを持たない。従って、上例においても⑤以外はすべて「親近する」という訳語でそのコンテクストの持つ意味合いを満たすことができると言っても、過言ではないだろう。

ウパニシャッド文献における upaas には明らかに「祈り」の意味概念を読みとることができた。しかし、上に見た初期仏教典籍における upaas に「祈り」の意味概念を読みとることは不可能に近いと言える。

従って、上例の upaas を「念ずる」と訳すことは全くもって不適当だし、ましてや「信奉する」などというような訳語を与えるこは到底不可能である。

確かに「親近する」という行為には、その状況によって一種の慇懃さや 敬意に似た心理が働いている場合も予想されるが、ここではそのような心

upa-√ās に祈りの概念を読みとれるか(前谷 彰(恵紹)) — 27 —

理的作用は、何ら重要な意味を持たないと考えるのが妥当である。

上例(①から④)から見ると、「親近する」対象は釈尊一人だけではなく、比丘集団(釈尊を含む場合とそうでない場合がある)というコンテクストであることは容易に理解できる。③④をどのように処理するかという問題は残るが、聖典の成立層に関わる問題を無視すれば、次のように考えることも不可能ではないだろう。

このことから、upaas は「正式に比丘たちへの仲間入りを果たしていない(まだ具足戒を受けていない)」状況を示唆していると考えられ、upaas は upa-saṃ-√pad の前段階的状況を指示することがおのずと明らかになるであろう。

初期仏教典籍における upaas に「祈り」や「信奉」の概念を読みとることはできないというのが当論攷の結論である。そうすると、upaas の名詞形である upāsika 及び upāsikā の語にも、当然「祈り」や「信奉」という意味概念を読みとることはできない。それ故に、当然 upāsika 及び upāsikā をして、「祈(願)者」とか「信奉者」というような概念で捉えることは美し控えられるべきなのである。

「祈り」という精神活動及びその行為は、古来よりごく当たり前に行われて来た宗教的活動の根幹をなすものだと考えられている。その証拠に、ウパニシャッドというバラモン世界の思想体系の中では、「祈り」が非常に重要な位置を占めていることが確認できた。ところが、一方で、初期仏教典籍においては upaas に、「祈り」の意味概念を読みとることができないことが確認できたわけである。しかし、これは初期仏教の思想体系の中で、upaas が「祈り」の概念を持ち得ていないことの事実を確認したことだけを意味するのではない。

つまり、初期仏教の思想体系は、当論攷で概念規定を行ったところの「祈り」そのものの精神活動及びその行為を容認しないことを意味することに気づかなければならないのである。それは、初期仏教における教理体系の根幹をなす「自灯明」(atta-dīpā)の原理原則からすると、容易に理解できることであろう。

### 註

(1) 研究発表の際に、桂紹隆先生より、服部正明先生が upaas を「念想する」という意味に解釈しておられるというご助言を頂戴した。筆者も当該箇所での訳語については服部先生のご見解に賛同するが、「念ずる」と訳す方が「念想する」よりも、より広義の「祈り」の実際相を表現できると考え、この訳語を与えておいた。因みに、今回ウバニシャッドは Radhakrishnan 本を使用したが、彼によると、ここでの upaas を "meditate"と訳している。Radhakrishnan, S. [1953] *The Principal Upaniṣads*, London, p. 184ff.

また、佐保田鶴治によれば、当該箇所に限らず、upaasをすべて「崇信する」と訳しているが、このコンテクストに関して、「崇信」という概念を読みとることは困難と言わざるを得ない。

佐保田鶴治 [1979] 『ウパニシャッド』 p. 83ff....etc.

- (2) 辻直四郎 [1990] 『ウパニシャッド』 p. 168 研究発表の段階では Radha-krishnan 本のみによってレジュメを作成したため、当該箇所のサンスクリット原文の誤りに気づかなかったが、vidyām は avidyām ではないかというご指摘を東京大学の高橋孝信先生より頂いた。そこで、後日数種の別本によって確認したところ、この箇所は Radhakrishan 本の誤りであることが確認できたので、本文では否定辞の a を附して avidyām に訂正しておいた。
- (3) Radhakrishnan も "worship" と訳している。ibid., p. 275 尚, BĀU. IV.
  4. 16などでも「信奉する」という意味概念を持つ upaas の用例が見出されるが、本稿では1例を上げるにとどめておいた。
- (4) Oldenberg, H. [1896] Upanisad, ZDMG. 50, pp. 458-462
- (5) Senart, É. [1909] Upās—upaniṣad, Melchior de Vogüe, p. 575ff.
- (6) Deussen, P. [1922] Allgemeine Geschichte der Philosophie Bd. 1, 2. Abt. Die Philosophie der Upanishad's. 3, S. 14
- (7) Shayer, S. [1927] Über die Bedeutung des Wortes upaniṣad, *RO*. III, S. 59-62
- (8) Falk, M. [1938] Upāsana et Upaniṣad, RO. XIII, p. 140
- (9) 研究発表の際に、大正大学の広澤隆之先生から、まず一点目に全用例の中で⑤だけはコンテクストが異なるのではないかというご指摘を頂戴したが、これに関しては筆者によってみても同様の見解であるが、ここでは参考までに上げておいた。第二点目として、upaasが釈尊やサンガに「近づく」「親近する」というsituationからすると、その行動には「敬意」といった感情が付随されることが予想されるのであるから、初期仏教典籍におけるupaasにも「信奉」や「祈り」の概念を読みとれるのではないかというご意見を頂いた。しかし、筆者の見解は本節にて詳述しておく。